The Blinded City: Ten Years in Inner-City Johannesburg

Matthew Wilhelm-Solomon

Johannesburg: Picador Africa 2022 (kindle version)

2023年8月、ジョハネスバーグ中心部でビル火災が発生し、逃げ遅れた住民ら70名以上が死亡したというニュースが世界を駆け巡った。このビルはジョハネスバーグに多数存在する、適切な維持管理がなされずスラム化した、いわゆる「ダーク・ビルディング」のひとつであった。火災の直接の原因は明らかになっていないが、水道も電気も止められた劣悪な環境のなかで多くの人びとが密集して暮らしていたことが、この悲劇の背景にあったとみられている。

本書の著者は、このようなジョハネスバーグの「ダーク・ビルディング」に暮らす人びとを10年にわたり継続的に調査してきた人類学者である。本書の物語は2010年から始まり最後はコロナ禍まで、住民組織のリーダー的な存在で視覚障害をもつジンバブウェ出身男性や、亡き娘の子どもを養育していたものの住環境が子育てに適さないという理由で行政により孫娘と引き離された南アフリカ人女性など、数名のキーパーソンとその家族のエピソードを行き来しながら、概ね時系列で進む。本書を通じて中心的に描かれるのは、「ダーク・ビルディング」に暮らす人びとの喜怒哀楽に満ちた日常生活と、その生活拠点である住居を確保し続けるための闘いである。

「ダーク・ビルディング」は多くの場合、本来の所有者が暴力や脅迫によって追い払われ、乗っ取られた状態にある。住民のほとんどはきちんと家賃を（建物を乗っ取った「家主」に対して）支払っているが、建物自体が不法占拠状態にあることは、住民の暮らしの安全性と安定性を脅かす。冒頭に言及した火事ほど甚大な被害に至らずとも、火事が彼らにとって日常的な脅威であること、また暴力的な犯罪被害に遭う危険性も高いことが、本書のいくつものエピソードによって示される。また、本書に登場する人びとは、建物の危険性や再開発を理由として頻繁に立ち退きを余儀なくされている。立ち退き対象の住民に対しては、地方政府が代替的な住居提供の義務を負うことが憲法訴訟によって確定しているが、ジョハネスバーグ市当局の対応は不誠実なものであり、代替的な住居が提供される場合でも、国籍や身体障害の有無などで理不尽に線引きがなされることがあることを本書は明らかにしている。「ダーク・ビルディング」の住民にとって、安全で安定した「ホーム」と言える場所への希求がいかに切実であるかを、本書は浮かび上がらせている。

著者は学術論文や学術書も出版しているが、本書ではあえて学術書の体裁を避け、ジョハネスバーグで生まれ育った著者自身の経験や、著者と調査対象者との関係性についても多くの紙幅を割いている。それによって読者は、著者の思考回路や感情を後追いし、臨場感をもって本書を読み進めることができる。南アフリカの都市部の人びとの暮らしや都市再開発の課題について理解を深めるのに有益な、優れたノンフィクション作品である。

牧野　久美子（まきの・くみこ／アジア経済研究所）

© IDE-JETRO 2024